

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-169	23-414	手稲溪仁会病院 白坂知彦 独立行政法人国立病院機久里浜医療センター松下幸生
<b>題名 (原題/訳)</b>		
Alcohol use and dementia: a systematic scoping review アルコール使用と認知症：系統的スコーピングレビュー		
<b>執筆者</b>		
Jürgen Rehm, Omer S. M. Hasan, Sandra E. Black, Kevin D. Shield and Michaël Schwarzsinger		
<b>掲載誌</b>		
Alzheimers Res Ther. 2019 Jan 5;11(1):1. doi: 10.1186/s13195-018-0453-0.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
アルコール、アルツハイマー病、脳機能、脳容積測定、認知、認知症、リスク、系統的レビュー、血管性認知症		30611304
<b>要旨</b>		
<p><b>背景：</b> アルコール摂取は認知症や認知機能低下の危険因子として特定されています。しかし、飲酒のパターンによっては有益な効果をもたらすことが分かっています。</p> <p><b>方法と結果：</b> 飲酒と認知症の関係を明らかにするために、Medline、Embase、PsycINFO を使用して 2000 年 1 月から 2017 年 10 月までに発表されたシステマティックレビューを系統的に検索し、スコーピングレビューを実施した。全体で 28 報のシステマティックレビューが特定され、そのうち 20 報は飲酒量と認知障害/認知症の発症率の関連、6 報は飲酒の側面と特定の脳機能の関連、2 報は誘発性認知症であった。因果関係は確立できなかったが、中期から後期成人期の軽度から中等度の飲酒は、認知障害および認知症のリスク低下と関連していた。多量の飲酒は、脳構造の変化、認知障害、およびあらゆる種類の認知症のリスク増加と関連していた。</p> <p><b>結論：</b> 過度の飲酒を減らすことは、認知症の効果的な予防戦略となる可能性がある。</p>		